



埼玉県深谷市とはこれまで縁がなく、埼玉県北部にあって、中山道の宿場町で、深谷ネギと酒沢栄一の生誕地であることすら知らなかった。

たまたま先般、深谷市で用事があって出向いたが、まさに深谷駅の赤レンガの立派でクラシックな駅舎に驚いてしまった。東京駅の丸の内口駅舎の建設に使われたレンガは、深谷にあった日本煉瓦製造が製造して運んだものだそう。1996年に深谷駅を改装する折に、こうした縁を踏まえて東京駅の赤レンガ駅舎をモチーフに設計されたとのこと。ここで「三三東京駅」とも呼ばれているらしい。

しかしながらレンガが線路上に剥落する可能性が指摘されたことから、実はコンクリートの壁面にレンガ風のタイルが貼りつけられているのだそう。それにしても見ごたえ十分で、駅舎の撮影のために訪れる鉄道ファンや観光客が絶えない。話にも納得させられてしまった。

これは別の次元で驚かされたのが映画館。「深谷シネマ」としての活動である。市内

の別の場所にあった映画館を、区画整理事業にもなつて2010年に現在の深谷市深谷に移転して深谷シネマとして再オープンしたものである。七ツ梅酒造の広大な跡地を活用して、素敵な嵐風の映画館が設けられており、その周囲には七ツ梅酒造の店舗や倉庫等

の建物を生かした販売店や飲食店、お茶屋、古本店等が並んでおり、大正時代のような不思議な空間が形成されている。ここではラマや映画作品のロケも数多く行われているという。

深谷シネマは固定席57席の小規模かつこじんまりした映画館で、毎日、午前10時から夜の10時前後まで5本の異なる映画が上映されている。料金は一般で1100円。ピーク時よりは若干減少している。とはいえ、人口14万

一栄谷の 異見私見

しネママで町おこし

3千人の深谷市で、毎年23千人前後の入場者数をキープしており、何とか赤字を出さなくして、経営レベルを確保して、映画の街・深谷を実現している。

この深谷シネマを運営しているのは特定非営利活動法人シアター・エフが「ミニシアター」を立ち上げるためのサークルが中心になって2000年にNPO法人化したものである。「映画館は街の必需品」をコンセプトに、映画は文化に欠かせない要素であるだけでなく、映画をつづけての商店街の活性化を目指す。深谷でも昔は映画館が4つもあったが、映画の斜陽化で閉館が相次ぎ、映画館がない状態が長く続いたものを、市民の方で映画館の復活を果たしたものだ。目下、シアター・エフは次のステップとして、全国の市町村の4分の3には映画館がないという現状を踏まえ、ワーカースコアをはじめとする団体等とも連携しながら、全国の市町村に映画館を設置する運動を巻き起こす準備を進めつつある。

地域おこしの仕方は区々であるが、市民の主体性を基本に、コアづくりがしつかりできれば、歴史や景観等をすぐれた地域資源として活用できることを示唆する。さらに各地での取組みを支援しネットワークを広げていくところに次の飛躍のポイントを見出そうとしている。

(農的社会学デザイン 研究所代表)